様式Ｃ□ １９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　３日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００９～２０１２
課題番号：２１５２０３３８
研究課題名（和文）　後期ディドロの生理学的人間観の研究
—『生理学要綱』の間テクスト的読解—
研究課題名（英文）　Research on the physiological Conception of the late Diderot. Intertextual Reading of the *Éléments de physiologie*
研究代表者
寺田　元一（TERADA MOTOICHI）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号：９０１８８６８１

研究成果の概要（和文）：『生理学要綱』の最大の典拠と推定されるハラー『生理学原論』をラテン語で読み、それ自体が、ハラーの生理学者としての研究成果であるだけでなく、ヨーロッパ中の生理学関係の古典ならびに最新著作を整理した総合的著作であること、その科学的かつジャーナリスト的活動は『百科全書補遺』の生理学項目執筆にも継承されたことを解明した。ディドロはそのような間テクスト的ハラー生理学を唯物論的に換骨奪胎することで『生理学要綱』を執筆した。そのテクスト生成の研究は今後の課題だが、それに必要な SP 写本の暫定的校訂版を作成し、HP に掲載した。

研究成果の概要（英文）：I read in Latin Haller's master-piece *Elementa physiologiae*, supposed to be the most important of the sources Diderot referred to in order to write his *Éléments de physiologie*, and showed that the work is not only the results of his researches Haller made as physiologist, but also a fruit of his erudite and journalistic synthesis of the classical and recent works developed all over Europe, and that even after his master-piece Haller adopted the same stance in order to contribute a lot of physiological articles to the *Supplément à l'Encyclopédie*. Diderot deconstructed such a hallerien physiology already constructed intertextually and remade his intertextual text, *Éléments de physiologie*. Whose generation will be one of the most important subjects of my future studies. In order to realize it, I made a provisional edition of the SP copy and uploaded it on my HP.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学
キーワード：フランス文学

１．研究開始当初の背景

国内では逸見龍生、中尾雪絵などの研究があるが、本研究課題のほんの一部を扱うに止まっている。国外では *L'Encylcopédie du* Rêve de D'Alembert *de Diderot*, sous la direction de Sophie Audidière, Jean-Claude Bourdin et Colas Duflo, CNRS Editions, 2006 が最近出版され、「折衷」の名手ディドロが『ダランベールの夢』の執筆に際して、モンペリエ学派（特にボル

ドゥとメニュレ）やモーペルチュイなどから種々のテクストを「折衷」して、『ダランベールの夢』という間テクスト性の高いテクストを編集していったことを明らかにした。私の研究が行おうとするのは『生理学要綱』について同様の間テクスト性、ディドロの「折衷」の実態を解明すること、さらには、そうした独得の認識や知の編集方法を通じて、それと通底する形で、ディドロの最晩年の人間観ひいては唯物論がいかなるものとして成立したかを解明することである。これについては国外でもまだ本格的な研究がなされていない。ただ、『生理学要綱』のテクストについては、古典的にはジャン・マイエの校訂版が、ついでそれを継承した『ディドロ全集』の校訂版があり、最近パオロ・クィンティーリによる校訂版も Honoré Champion から出版された（2004 年）。これらの校訂版、とりわけクィンティーリのものがこの研究を進める上で最大の武器となる。その編者注にはディドロが「折衷」編集したテクストの元になったと思われる典拠が示されており、その典拠と比較することでディドロの「折衷主義」に迫ることができ、同時に、ハラーやカレン、エルヴェシウスやラ・メトリーなどのテクストをディドロがいかに「折衷」・再編して、モンペリエ学派やモーペルチュイに影響された自己の生気論的人間観をいかに乗り越え、新たな唯物論的生理学的人間観に到ったかを具体的総合的に明らかにできるからである。

このような着想に到った理由としては、１）私が長年ディドロについて研究をしてきて、2003 年に『「編集知」の世紀』という著作を出版し、そこで『百科全書』の知の主たる特徴が「折衷主義」的「編集知」にあり、そうした知を体現するのが編者ディドロだったことを明らかにしたことが挙がる。しかも、その知の特徴は彼の中後期の著作に貫徹されているにも拘わらず、従来必ずしも「折衷主義」的「編集知」の視角からディドロの哲学が十分研究されてこなかった。本研究はそれを『生理学要綱』に対象を絞って徹底的に行おうとするものである。２）私は「18 世紀フランスにおける創発論的自然観の研究」ならびに「中国医学の身体観がモンペリエ学派の生気論的生命観の成立に果たした役割の研究」という題目で一昨年まで連続して科学研究費を獲得し、モンペリエ学派の生気論周辺の研究を続けてきた。また、平成 13 年度と 17 年度にともに 3 ヶ月近くにわたって、フランス人の 18 世紀哲学研究者シャルル・ヴォルフを名古屋市立大学「外国人研究者招へい経費」で招き、共同研究する機会を得ることができた。その結果、生気論を中心とする生理学や自然哲学の主要著作の内容、その歴史的展開、現在の研究状況、残された課題を深く検討することができた。モンペリエ学派のボルドゥ、メニュレ、フーケ、バルテーズらの主張の共通性とともに差異も明確にできた。このようにある程度まとまった生気論研究を既に行ったので、そこから私の主たる研究対象であるディドロに帰るのは自然の成り行きであった。その際、帰るべきは本来ならば『ダランベールの夢』ということになるが、一昨年末に上述のように *L'Encylcopédie du* Rêve de D'Alembert *de Diderot* が出版され、『ダランベールの夢』がモンペリエ学派やモーペルチュイの影響を強く受けていること、彼らの著作の「折衷」的利用によってそのテクストが編まれていることが既に明らかになった。そこで、的を『生理学要綱』に代え、生気論的人間観から生気論を越えた新たな人間観への展開を、間テクスト的な「折衷」というディドロの認識・編集の方法に留意し、徹底して掘り下げる方向で研究を進めることにしたわけである。その意味で、３）『「編集知」の世紀』で 18 世紀の市民的公共圏や『百科全書』の知と通底するものとして浮き彫りにしたディドロの「折衷」的「編集知」が、生気論や創発論とつながるディドロの生理学的人間観の知のネットワークをいかに構成し、独自の自然観を生み出したかという方向で、１）と２）を総合・発展させることも企図している。そこに本研究の主たる特色がある。

２．研究の目的

ディドロの唯物論的自然観ならびに人間観の中心に生理学的人間観が位置することはよく知られている。『百科全書』期（中期）のディドロには、項目「動物」や『自然の解釈に関する思索』といった著作があり、ビュフォンとモーペルチュイからの影響が顕著である。後期には『ダランベールの夢』三部作があり、そこではモンペリエ学派のボルドゥが登場することからもわかるように、彼らの生気論の影響が顕著である。晩年には『生理学要綱』を残すが、そこになるとディドロは彼本来の「折衷主義」を発揮して、当代最高の生理学者といわれたハラーやカレンなどの生理学をはじめとして、多くの生理学書を読み込み、さらにはエルヴェシウスやラ・メトリーら唯物論的哲学者の著作も批判的に検討しながら、ディドロ固有の生理学的人間観を展開している。なお、ディドロ本来の「折衷主義」とは「偏見、伝統、古さ、普遍的合意、権威、つまりひとくちに言って、多くの精神をおさえこんでいるあらゆるものを踏みにじることによって、自分自身で考えることや、もっとも明白な一般的原理に立ち帰ってそれを検討し、議論することや、また、自分の体験と理性の証言にもとづくもの以外は認めないことなどを敢行する」ことであ

る。
　ゆえに、本研究の目的は、１）従来連続的なものと考えられてきた『ダランベールの夢』の人間観と『生理学要綱』の人間観には違いがあること、２）ディドロの最終的到達点である『生理学要綱』の生理学的人間観が『ダランベールの夢』やそれが主として依拠したボルドゥらの生気論的人間観の地平をどこまで乗り越えたか、３）その差異ならびに乗り越えの原因となった後期ディドロの生理学的人間観の充実が、いかなる書物をいかに「折衷」することによってもたらされたか、その「折衷」の実相に迫ること、最後に４）その人間（自然）観はいかなる生理学的人間観（または唯物論）と特徴づけられるか、を明らかにすることである。

３．研究の方法
　典拠となるテクストとディドロの『生理学要綱』のテクストの比較、ディドロの諸テクストの編集・組み合わせ法の特徴、それら諸テクストのネットワークやクロスレファレンスから新たな知・体系（すなわち新たな生理学的人間（自然）観）をいかに「折衷」し構築し「創発」させたかを探るのが、本研究での私の方法である。つまり具体的には、既に述べたように、クィンティーリなどの『生理学要綱』校訂版の編者注に、ディドロが「折衷」・編集したテクストの典拠が示されているので、その典拠の記述をディドロの記述と比較することで、ディドロの「折衷主義」、知の編集方法の要諦をまず解明する。ついで、ハラーやカレン、エルヴェシウスやラ・メトリーなどの諸テクストをディドロがいかに「折衷」・再編し、それを通じてモンペリエ学派やモーペルチュイに影響された自己の生気論的人間観をいかに乗り越え、新たな唯物論的生理学的人間観を間テクスト的に編み上げていったか、を具体的総合的に明らかにすることを考えている。
　このような方法に基づく研究を具体化するために、『生理学要綱』に登場する文献をすべてなんらかの形で手元に置く必要がある。そのために、１）フランスの国立図書館（ＢＮ）のガリカというデータベースや大学間医学図書館（BIUM）のデータベースで電子化されたものをできるだけ利用する。また、18 世紀イギリスで出版された図書をほぼ網羅するデータベース ECCO もできれば利用したい。ただ、これは個人利用ができず、大学で利用しようとしても利用料が高くて、私の所属する機関では今のところ利用できる状態にない。２）１のようにインターネットでアクセス可能なもの以外の資料は、a.ＢＮなどで必要な資料を CD-ROM に入れて送ってもらう、b.比較的安価で現物が手に入るものはそれを古本屋で購入する、c.デジタルカメラで撮ることが許されているところもあるので、その場合はデジタルカメラに収めて利用する。
　また、『ダランベールの夢』や『生理学要綱』と関係する基本的な研究文献をすべて手に入れたいと考えている。かなりのものはこれまでの研究で揃っているが、それでもなお 20～30 件ほどの著書や論文が必要となるであろう。
　それらの資料の収集と並行して、上記の方法に基づく研究を、資料が整っているところから進めてゆき、テクストの比較、比較からわかるディドロの編集の特徴、諸テクストのディドロ的「折衷」、衝突、連関付けの仕方、そこから生気論に代わる新たな人間（自然）観がいかに構築されたかを検討し、諸研究書の記述などを参考にしながら、必要なノートをとる。
　現在オーストラリアのシドニー大学で教鞭を執るシャルル・ヴォルフとは 2001 年以来、私が彼を招へいした期間以外にもインターネットや学会などを通じて共同研究をずっと継続しており、本研究に当たっても研究協力者として私のノートや論攷についての意見やアドバイスを適宜求め、研究内容を深めていく予定である。

４．研究成果
　平成21年度については必要な文献・資料を調えることを第一とした。とりわけハラー『生理学原論』の複写が最大課題だった。しかし、幸いなことに全7巻のうち最初の5巻まではインターネットでGooglebooksからダウンロードできることが判明し、それらを無料でダウンロードしプリントアウトすることができた。残りの2巻についてはアメリカの古本屋がたまたまそれらを端本として安く売り出していることが見つかり、それを購入することができた。さらに、2月の後半にパリに出張し、新本や古本を日本の半額程度で購入することができた。また、国立図書館ではディドロ『生理学要綱』の写本のマイクロフィルムを注文し、それ以外にも、17、8世紀に出た生理学関係著作などいくつかの貴重資料を、許可を得てデジタルカメラに撮るなどした。本研究の目的である『生理学要綱』の間テクスト的読解のために必要な資料はほぼ収拾することができた。
　当初はハラー『生理学原論』、ハラー『生理学初歩』の仏訳、ディドロ『生理学要綱』という三著の関係をエクセルに記入する作業を行う予定だったが、ディドロ『生理学要綱』の写本と二つの校訂版（マイエのものとクィンティーリのもの）を比較することしかできなかった。ただ、各校訂版にある原文の起こし誤りを発見し、また編者注に見られる典拠指示の相違などを調べ、そ

れらをエクセルに記入できたので、間テクスト的読解のために必要なテクストの背景的読解を深め、今後の研究の足場を形成できた。

22年度は、１．ディドロ『生理学要綱』が典拠としてもっとも利用したと思われるラテン語の大部の著作、ハラー『生理学原論』を読み進めること、２．サンクトペテルブルグにある『生理学要綱』の写本を調べること、以上二点について主として研究を進めた。

１については、18世紀に書かれたラテン語の生理学書ということもあって、読解に苦労したが、次第に専門用語にも慣れ、ある程度の速度で読めるようになってきた。それを通じて、この著作自身が当時の最先端の生理学の成果を盛り込んで、間テクスト的に成立していること、とりわけ各国のアカデミーなどで出版された研究報告を丹念に読み込み、それらを典拠として示しながら、ハラーなりに整理・要約して体系化していることがわかった。ディドロは『生理学原論』を典拠として利用しただけでなく、当時の最先端の研究報告や研究書を知るための情報源としても利用したこと、その意味で、ディドロによる生理学の間テクスト的読解に、ハラーは大きな影響を与えている。

２については、ほぼ二週間にわたる調査で、サンクトペテルブルグ（SP）写本とその校訂版である19世紀に出たディドロ全集の版との相違点（写本の起こし間違い、校訂者による読点などの多数の付加など）を確認するとともに、パリ写本（したがって、それを元にした現行のディドロ全集の版とクィンティーリの校訂版）との構成上の相違点も確認できた。とりわけ後者について、最近の校訂版が依拠するアカデミックな論文風のパリ写本に対し、モラリスト的筆致の独自性や優越性を確認できた。SP写本に読点が少ないが、それもまた、モラリスト的文体からの要請と想定されることも見えてきた。

23年度は、『ダランベールの夢』まではボルドゥやメニュレを中心とするモンペリエ学派の生気論の影響下にあったディドロが、その後それ以外の脱＝機械論的潮流からも大きな影響を受け、その間テクスト的広がりのなかで、『生理学要綱』を執筆したこと、中でもハラー『生理学原論』の影響は重要で、その内容に影響を受けただけでなく、そこに引証された典拠もディドロは間テクスト的に利用したことを引き続き追求した。

その意味で、本研究の遂行に当たって、ハラー『生理学原論』を間テクスト性の観点からきちんと読解し、それとディドロ『生理学要綱』を比較することが決定的に重要である。『生理学原論』がラテン語の大部の著作であることから、これはまだ欧米の研究者も行えていない。そのためにひたすら『生理学原論』の読解に傾注した。当初の予定では全八巻中最低でも第一巻は読了する予定だったが、ラテン語一般の読解上の困難に留まらず、18世紀生理学ラテン語独自の用語や歴史的文脈の問題もあって、第一巻の半分程度に留まっている。

そのため、『原論』読解の成果を『生理学要綱』の間テクスト的読解に活かすまでには至っていない。ただ、以前と比べれば、かなりスムーズにラテン語を読めるようになってきた。

24年度は、ハラー『生理学原論』の読解をさらに進めたが、まだ第一巻全部を読み通すに至っていない。9月に「日仏啓蒙・『百科全書』研究集会」が開催され、そこでRepenser Albrecht von Haller comme ’encyclopediste’: Son intervention erudite, journalistique et scientifique dans le *Supplement à l’Encyclopedie* と題する報告を行い、同名の論文を3月刊行の『『百科全書』・啓蒙論集』第二巻に発表したことも影響している。ただそのおかげで、『生理学原論』の代わりに、晩年にハラーが寄稿した『百科全書補遺』項目を読み込み、関連する研究書・論文も読んで、単なる生理学者に留まらないこの博学の知の巨人（ジャーナリスト）について、その研究スタイルや知のネットワークなどを深く知ることができた。ハラーはラテン語、フランス語、ドイツ語で文章を書いており、研究は母国であるスイスやドイツで盛んだが、今回ドイツ語でいくつか研究書・論文を読み、研究情況をフォローするだけでなくドイツ語の読解力も高めることができた。また、『百科全書補遺』の彼の生理学項目からも、『生理学原論』同様、それが同時代あるいは少し前の非常に多くの生理学論文・著作の間テクスト的集成であることを理解できた。

当初の予定では、ディドロがハラーのどの部分を取り出し間テクスト的に『生理学要綱』を執筆したか、を報告書で明らかにする予定であったが、『生理学原論』の読解が進まなかったこともあって、それは断念した。その代わりにHPを作成し、そこにロシア・サンクトペテルブルグにあるSP写本を元にした『生理学要綱』の暫定的校訂版を掲載し、世界中の研究者がアクセスしダウンロードできるようにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Motoichi TERADA, Atomisme et hylémorphisme : deux sources de l'émergentisme à l'Âge classique ; le cas de Nicolas de Blégny, *La Lettre Clandestine*, 査読有、18、2010、219-237

② Motoichi TERADA, Une « façon » copiée-collée de l'*Encyclopédie* ? : avatars de textes de l'*HMARS* à l'*Enc.* par l'intermédiaire de E. Chambers, 『百科全書』・啓蒙研究論集、査読有、１、2012、1-40

③ 寺田元一、『百科全書』のコピペ的制作術？―科学アカデミー『歴史と報告』から『百科全書』へのテクスト変容（チェンバーズを介して）―、人間文化研究、査読無、17、 2012、1-29

④ Motoichi TERADA, Repenser Albrecht von Haller comme 'encyclopediste' : Son intervention erudite, journalistique et scientifique dans le *Supplement à l'Encyclopedie*, 『百科全書』・啓蒙研究論集、査読有、2、2013、19-39

〔学会発表〕（計５件）

① Motoichi TERADA, Atomisme et hylémorphisme : deux sources de l'émergentisme à l'Âge classique ; le cas de Nicolas de Blégny, La litterature philosophique clandestine et les sciences, 2009 年 6 月 26 日、ソルボンヌ大学（フランス）

② 寺田元一、モンペリエ学派の脈学と生気論、日本フランス語フランス文学会　ワークショップ「18 世紀的なるものから離れて」、2009 年 11 月 8 日、熊本大学（熊本）

③ Motoichi TERADA, Une « façon » copiée-collée de l'*Encyclopédie* ? : avatars de textes de l'*HMARS* à l'*Enc.* par l'intermédiaire de E. Chambers, 国際 18 世紀学会、2011 年 7 月 27 日、グラーツ大学（オーストリア）

④ 寺田元一、『百科全書』のコピペ的制作術？―科学アカデミー『歴史と報告』から『百科全書』へのテクスト変容（チェンバーズを介して）―、『百科全書』研究会、2011 年 12 月 3 日、慶應大学（東京）

⑤ Motoichi TERADA, Repenser Albrecht von Haller comme 'encyclopediste' : Son intervention erudite, journalistique et scientifique dans le *Supplement a l'Encyclopedie*、日仏啓蒙・『百科全書』研究集会、2012 年 9 月 30 日、慶應大学（東京）

〔図書〕（計 1 件）

① Motoichi TERADA et al., Centre international d'étude du XVIIIe siècle Ferney-Voltaire, *Diderot, l'Encyclopédie & autres études. Sillages de Jacques Proust,* Textes réunis par Marie Leca-Tsiomis avec la collaboration d'Alain Sandrier, 2010, 212 (191-202).

〔産業財産権〕

○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~terada/

６．研究組織

(1)研究代表者

寺田　元一（TERADA MOTOICHI）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号：９０１８８６８１

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：